

## 巻頭言

広島大学「比較論理学プロジェクト研究センター」は、異なった文明間の対話と理解が最も求められている現在、インドとヨーロッパ、東洋と西洋の思考の根源を追究し、その一致点と差異点を一つ一つ緻密に比較検討することにより、相異なる文明間の対話可能な接点を見出すことを目的としている。

そのために、昨年春以来、広島大学大学院文学研究科のスタッフを中心に、古代ギリシアの論理学、中世哲学、ドイツ観念論、現代論理学、現代言語哲学、インド論理学、仏教認識論、インドの言語哲学と修辞学を専門領域とする研究者が、各自の指導する大学院生とともに参加するセミナーを定期的で開催し、それぞれの研究成果を発表し、その内容を全員で検討してきた。その内容は、既にホームページ上で公開している。<http://home.hiroshima-u.ac.jp/logos/logica/>参照。

今後は、「論証」「弁論術」「問答法」など論理学に関わるタームだけでなく、「言葉」「意味」「文法」「沈黙」「存在」「知性」「自己認識」など思考の根源に関わるキーワードに関して自由討論を積み重ねることにより、東西の思考方法の接点を見出していきたい。

また、本研究プロジェクトは、単に教官レベルでの共同研究ではなく、様々なバックグラウンドを持った複数の教官が、強い専門性と柔軟で複眼的な思考ができる新進の研究者を育成するという教育的目標を持つことを特に強調しておきたい。東洋と西洋の哲学研究者がこのような形で定期的集まって、共同研究と教育を行うことは世界の大学でも希な出来事ではないかと、密かに自負している。

研究成果は、積極的に外に発信していくことを目指している。本研究報告書の刊行は、そのささやかな第一歩である。

2004年1月

桂 紹隆